
魔法少女リリカルなのは 次元を超えし転生者

十六夜・零夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 次元を超えし転生者

【Nコード】

N1274BA

【作者名】

十六夜・零夜

【あらすじ】

現代系大学生オタクであった時枝楓は少女のパンツに埋もれて死んだ。

しかし、それが輪廻から弾かれた死であった為、自称神の実験の協力者として『リリカルなのは』の世界に転生することになった。

所謂ハーレム系、チート系、主人公最強系（？）の作品です。

苦手な人はすぐにも後方に直進してください。

第1話 転生理由、実験目的（前書き）

初めまして・・・十六夜・零夜いざよい・れいやと申します。

初投稿です。

更新ペースは出来るだけ速くしたいと思います。

第1話 転生理由、実験目的

俺の名前は時枝楓、ときえだかえで漫画やゲームが好きな所謂オタクと呼ばれる存在であるし、むしろオタクであることを誇りに思っている一般的な大学生だった。

そう、「だった」だ。

俺が夏のコミケに行った帰り、発車する電車に乗り込もうと駅の階段を掛け登ったとき事件は起きた。

前方にいた中学生らしき少女が俺と同様に電車に乗りこむために走っていたが、階段に足を躓いてしまいこちらに落下してきたわけだ。

俺は避ける事も可能だったが、その時見てしまった。

彼女が緑色の縞パンを履いていたことに・・・

結果、俺は彼女の下敷きになって階段からずり落ち何度も頭を強打して死んだ。

オカズになるだろうブツを楽しみにしていた分、本能的にリアルな刺激に弱っていたらしい。

最後に今日買ってきた同人誌だけでも読みたかった。そこで俺の意識は飛んだ。

「あゝ、悪い。キミ殺しちゃった」

意識が戻ったと思ったらそこはマト。ツクスの0と1しかない様な空間。

目の前にはグラスンをつけた芸能事務所のスカウトマン的な男。そこで吐かれた言葉はなんとも軽い雰囲気で重い発言。

「!!!!!!?!?!?!」

オイコラ、てめえつと言おうとしたが声が出ない。

傍から見て俺は口だけ動かしている変人にしか見えない。

「あ、ちよつと待ちな・・・・・・・・ほら、これで喋れるだろ」

「・・・・・・・・・・いう事?!? あ、やっと喋れた。ってオイテメえ! 俺を殺したってどういうことだよ!?!」

声が漸く発せられたことで、素に戻ったが男が言った「俺を殺した」って発言が気になり問いただした。

・
・
・
・
・

簡略化して三行に纏めると。

俺が助けた少女が死ぬ予定だった。

俺が助けることは予想外だった。

魂の輪廻から俺が外れたから、男の仕事が増えたらしい。

「あ、因みに俺、いわゆる神とか言うやつ。短いながらもよろしく」
男はそう言いながら丁寧に名刺を渡してきた。

「神？ 神ってあれか？ この世の事は全て知っているとかが、人をおもちや何かかにしか見ていないとか言うあの神か！？」

生憎、マンガやアニメの二次創作にも精通している俺としては神が間違えて殺しちゃった主人公をマンガやアニメの世界に転生させてチートにしてくれるというある種のテンプレ神は実際には無いと思っている。否定的な訳ではない、現実的に考えてそんな簡単に転生なんて出来る訳が無いからだ。

「あゝ、キミそういう部類の人間か。まあ実際そういう神もいるよ、でも俺は人をおもちやと見ている訳ではないし、謝罪をしてチートにしてやろうとかいう君の考えている神でもない」

俺の心を読んでか、余計な補足説明をしながら自称神は話を続けた。

「俺は所謂研究者の部類に入る。人がどのような状況でどのようなことを考え、どのような選択をするか。誕生を起点として死を終点とする人の生にはどの位の法則性を持ち、特異性を持つか。なんていう研究をしている奴も居る。・・・自称じゃねーよ、自称じゃ」
心のツツコミにも答えつつ、俺に説明する神。無駄に細かいのかもしれない。

「ふーん、で。アンタは何の研究をしているわけ？」

興味は無いが俺がここに居る理由を知りたいため、情報を得ようとした。

「俺の研究は少々特殊でな、人と人の関わり合いについてだ。」

人と人との関わり合い？ どういう事だ？

「人は関わり合いを求める種族だって言うのは、お前さん自身今まで生きていて何度も経験したことがあるだろう。話をする、手を握る、同じ行動を取る、誰かを助ける等、その行動は五万とある」

確かに、ダチとつるむ時だって同じ行動を取ることがある。

馬鹿やったり、熱く語り合ったりといった事をやった事もあるしな。

「そして、その一つ一つの行動で人の生とは終着点が異なる。所がだ、これは実際に生きている人に当たるものであり、創作物に当たるものではないということは判るだろうか？」

創作物？ アニゲー関連しか知らんが、確かにそうだな。態々半生を描くことなんて無いだろうし。

「一つは物語としての強制力という物だ。創作物の作者の世界は既に一定のことが定められていて、それを破る行為は決して起こらない。また例え定義を破る行動を起こしても、そのしわ寄せが予定外のところで出てきて結果を修正しようとする・・・」

とかなり長い時間、自称神の研究について熱く語られた。

「要するにだ、創作物に掛かる強制力を完全に無視した存在を置く事で創作物の登場人物にどの様に関わり変化を起こすことが出来るかという研究だ。」

「・・・で、俺はどっかの創作物の世界に転生して登場人物と関わり、創作物の結末を変えることが出来るかって事を実験する

んだろ」

大体予想が出来たが、あえて目的とか態々言うか？ 普通。

「勿論だ、共同実験者、今回の場合主要実験者となるキミに実験内容を伝えなければ、実験が成立しないからだよ。そして、キミが今回転生してもらった主な世界は「魔法少女リリカルなのは」の世界だ」

なのはか、一応ゲームまでしっかりやっている俺だけだ。あとフェイトは俺の嫁兼妹。

「まあ、一度不慮とはいえ死んだ身だし、記憶持ちで転生して、二次元に入れるって考えれば楽しそうだから、やっても良いが何か能力とかは付かないのか？」

やっぱり魔力ランクSSSとか御神流継承者とかレアスキル持ちとか有ったら面白いじゃんか。

「パンツ見て、不慮の死とかほざいてられる精神は大した物だが、そんなスキルは今回の実験には邪魔になる恐れがあるから控えて貰うぞ。」

なん…だと！？！？

「おい、魔法がある世界に行くのに魔法が使えないってヤバ過ぎだろ」

ただでさえ、管理局の上の奴等が真っ黒なのに改変とか出来んのか？

そう考えていると自称神は鼻で笑いながら言い放つ。

「最初に言ったが、人と人との関わりが今回の実験の肝だ。素質として魔力がSSSになったり、身体能力も人類の限界値まであげる事は可能では有るが、結局は努力をしなければ一般人。弛まぬ研鑽を続けられ、一流になるだろう。」

一応、いける事は行けんのかよ。それはそれで十分チートな気がするけどな。

「後は、レアスキルでは無いが女縁はかなり期待して良いぞ。特に主要キャラにはドンドン関われ。ハーレムなんて原作崩壊は研究に大きく進展を見せられるから、身体が保つまでやってみな」

とまあ、完全に遊んでいるような感じで言い放ちやがった。

「…了解。努力してモテモテになってストーリーに介入しろって事で良いわけだな」

これが本当のギャルゲーってか？　そういつて立ち上がると、自称神の横に扉が現れる。ここから転生するって感じかな。

「そうだ、お前の力を分かりやすく伝えるために意識下でパラメータがチェック出来るような事にはしてるから色々と参考に見てみるが良い。それじゃ実験開始だ」

自称神はそう言うのと、持っていたスイッチを押した。

ぱかっ！

扉の前に立つ俺の真下に穴が開いた。

「……………はあ？」

思ったのが遅いのか、動いたのが遅いのか、俺は穴に何の抵抗もなく落ちた。

「うおおおおおい！?!?!?!」

「ふむ、『テンプレートから急に外れた場合の人間の心理状況、行動』の実験だったが……あまり良いリアクションは取れなかった様だ」

小さくなる自称神の姿を目にして俺は『リリカルなのは』の世界に転生した。

第1話 転生理由、実験目的（後書き）

第1話でした。

次回から原作世界へ転生予定。

第2話 現状確認（前書き）

第2話公開

ストックなんて無かったんや。。。。

文章上、おかしい点があったら、報告よろしくお願いします。

第2話 現状確認

目覚めた時は朧げで、目に入るのは眩い光。
周りからは暖かな歓喜の声が聞こえてくる。

「あなた！ この子が私達の子よ！」

「ああ！ よく頑張ったぞ、ルミ！」

どうやら目の前にいる男女が俺の両親らしい。まだ目が見えないが、優しい人だと良いな。

・
・
・
・
・

こんにちわ、時枝楓改め力エデッフォーレットです。

僕は現在5歳の少年やってます。

一人称が変わってるって？・・・精神は肉体に引っ張られるとか物語の話だと思っていた頃もありました。

子どもだから当たり前だが、子ども扱いされると肉体が喜んでしまふという何とも言えない精神がそう何年も続く筈がなく、今ではこの有様である。

そんな訳だが、未だに原作の知識や前世の知識なんかは覚えていたりはしてる。原作突入するまでは覚えておきたい物だ。

5年間の記憶は是非とも無かった事にして頂きたい。アレは精神が

大人だとマジで無理だ。

赤ちゃんプレイとかしたい奴なら良さそうだが、僕にはそんな性癖は断じて無い。。。と思う。

さて、僕の今いる世界は第67管理世界「アイスピメント」一年中亜寒帯気候が広がる世界で文化レベルはC・・・漁業と酪農がこの世界の主要産業である。

別に此处で僕が生まれた訳でもないし、此处で育った訳でもない。父であるアルト＝フォーレットの仕事の出張の為である。

魔法地質調査、これが管理局員としての父の仕事だ。

管理世界における魔力素の成分や含有率、消耗率を地質から調査する事で、大型魔力駆動炉の建設の必要性を管理世界の政府や管理局に説明することらしい。

そこに短期の出張という事で、旅行がてら僕が付いてきたわけだ。

今は小さな街の貸アパートで留守番中・・・

「父さん、遅いな。夕食は一応用意出来たのに・・・」

僕は胚芽パンと羊乳のシチューを作って父さんの帰りを待っていた。料理は母さんから学び、食べられる程度の実力まで上がった。

何でも、知識や技術、能力は経験すればする程向上できるらしい。前世では苦手だった外国語、こっちは基本はミッド語だが、難なく覚えられたのが良い例だ。

魔力量は現段階だとD、原作まであと4年。それなりに戦える様にしなきゃ、実験に支障が出るかもしれない。

そんなこんなで、冷めたシチューを温めていた。そこに・・・

「ドカーン!!!」

爆音と強烈な白い光が街を覆った。

第2話 現状確認（後書き）

作者「というわけで、始めましたね」

カエデ「そうだな。……ってなんだよこの空間!？」

作者「いやあ、こういう小説にお決まりの何でもあり空間ですよ。こついのやってみたかつたんですよ」

カエデ「なるほど、まあある種のテンプレ感はあるけど」

作者「此処では、いわゆる読んでくれた読者さんのメールの紹介や質問に答えたり、キャラを知って頂くための雑談ブースって感じになっています」

カエデ「ふうん、……で肝心のメールっていうのは？」

作者「無い」

カエデ「まあ、まだ1話投稿してから1日経ってないし仕方が無いか」

作者「そういう事。という事で、また次回 ノシ」

カエデ「っ！ ちょっと待て！ その前に聞きたい事がある。いつになったら海鳴に行くんだ？」

作者「出来れば次回には地球に行きたいな。まあ実際は……」

カエデ「作者の腕次第って事か。さっさと更新しろよな」

作者「出来ればやってるが、生憎スマホで打つと結構遅くてな。毎日更新が今の所の目標だ」

カエデ「三日坊主じゃないことを祈るぜ」

作者「それでは」

カエデ「また次回で」

二人「バイバイ」 ノシ

カエデ「つかこの更新（第2話）を明日の夜やれば良かったじゃないか。。。」「

あっ!。。。。

第3話

死別、そして・・・（前書き）

間に合わな・・・かった。。。（ガクリ）

文章上、おかしい点があったら、報告よろしく願いします。

1 / 5

あとがき修正

第3話

死別、そして・・・

人の悲鳴。

子どもの泣き声。

爆発音。

建物が崩壊する音。

炎が木々を焼き落とす音。

爆音と共に襲った衝撃波は、5歳の身体を軽く吹き飛ばし、窓とは反対側の壁に頭を強打した僕が意識を失う瞬間まで聞いていた音は静かな街が阿鼻叫喚に包まれる音であった。

（おいおい、こんな所で俺は死ぬのか？ 話が違っじゃな・・・い・・・か・・・）

（・・・ようぶか！！ カエ・・・ぜった・・・から・・・）

意識の外、聞こえるか聞こえないか分からない所で、誰かが叫んでいる気がした。

「・・・知らない・・・天井だ・・・」

目が覚めて、最初に見たのは清潔感のある白い天井。鼻に香るは消毒液の匂い。聞こえる音は医療用語が交差する喧騒。背中に感じる

は少し固めのベッド。そして左手に感じる温かさは……………

「母さん……………」

母さんである、ルミ＝フォーレットの暖かい両手の感触であった。

疲れているのか、母さんは眠っていた。

薄い化粧が少し落ちて普段は目立たない目の下の隈が母さんの白い顔から浮き出る様に目立っている。

母さんは管理局の戦技教導官であり、原作のなのはの将来の先輩に当たる立場である。

毎日遅くまで訓練のスケジュールを組み立てて休日くらいしかゆっくり休めない筈なのに僕に料理や魔法を教えてくれる太陽のような人だ。

そんな母さんだが、ミッドにいるはずなのにどうして僕の左手を握っているのだろうか？

「……………カエちゃん？」

左手の指が動いた事に気が付いたのか、母さんは目を開いて僕の顔

を凝視した。

「おはよひ「カエちゃんっ！カエちゃんっ！カエちゃんっ！！！！」
ちよっ！？ 母さん！？」

起き上がり母さんに挨拶をしようとするが、急に抱きついてきた為
言葉が遮られた。

傍から見れば年の離れた姉弟が抱きついていてる様に見える。

実際、母さんは全体的に小さく童顔で20代前半の筈だが中学生に
間違えられる。

「ふがつ！！ 母さんっ！！ 苦しいよっ！！」

身長は低くてもそこは一児の母、胸はCカップはあり、谷間に僕の
顔を覆うことなど容易く、程よい弾力が僕の顔を弾いた。

抗議をすると、力は緩み苦しさは無くなったが母さんは頭を離そう
とはしなかった。

ふと頭のでっぺんに冷たさを感じた。

「・・・母さん？」

力の抜けた腕を解き母さんの顔を伺おうとした。

母さんの泣き顔を初めて見た。

僕が気絶した時、街で違法魔導師がテロを起こしたらしい。街にある魔力駆動炉を強奪しようとしたが、現地の管理局員との交戦となり街は半壊したらしい。

父さんは僕の待つ家に帰り、気絶した僕をアパートの大家に託し戦線へ向かい・・・・・・・・

帰らぬ人となった。

母さんはテロ事件を聞きつけ転送ポートからアイスピメントに駆けつけたそうだ。

気を失い、こうやって目覚めるまで4日経過し地味に僕自身生死の境を彷徨ったらしい。

父さんと僕を一度に失いかけ、母さんはショックで眠る事が出来ず、容態が安定した昨日の夜にようやく眠る事が出来たそうだ。

「ねえ、カエちゃん。。。これからどうしたい？」

涙を拭った母さんは椅子に座り直し真剣な顔で僕に聞いてきた。

「どうしたいって、言われてもどういう事が判らないよ」

前世でも身内の死を見る事が無かった僕は少なからずパニックにはなっていた為か母さんの言葉の意図が読めなかった。

「うーん…………カエちゃんは、お母さんと一緒に居たい？」
目を細めて話しかける母さん。それはまるで泣きそうな僕をあやすような声であった。

一緒に居る。

なんの変哲もない言葉だが、その言葉を聞いた後に残るものは…………
……一人という孤独。

その答えに辿り着いた途端、僕の目からふと、水が零れた。

「僕、お母さんと一緒に居たいよ……」

精神すら幼くなってしまった僕はただただ母さんと一緒に居たいという言葉だけが吐露していた。

「昔行つた、お母さんのおじいちゃんの故郷つて覚えている？」

母さんは嗚咽している僕の背中を優しく撫でながら昔の旅行の話をした。

母さんのおじいちゃんの故郷………忘れるわけが無い、むしろ忘れる事が出来ない。

第97管理外世界 現地世界名『地球』

魔法技術は全く無いがとても過ごしやすい世界であった。

僕のひいおじいちゃんはこの地球出身で、放浪の旅に出ていたら偶々ミッドについたらしい、

「そこでね母さん、………管理局の局員を休養して、カエちゃんとかちゃんと親子やろうと思ったの」

母さんはさっきの涙目な母さんとは正反対なキラキラした目で言い放った。

「さーて、そうと決めればさっさと引越すよ！

カエちゃん！」

退院して3日後。

「ルミ先輩、必ず帰ってきてくださいよ」

次元航空艦から母さんの部下だった人が話す。

「自分の気持ちに整理がついたら・・・・・・・・ね」

僕達親子は地球・・・海鳴に降り立った。

第3話 死別、そして・・・（後書き）

作者「・・・・・・・・」

カエデ「・・・・・・・・」

作者「・・・・・・・・」

カエデ「・・・・・・・・なあ？」

作者「（ビクッ！！）・・・なに？」

カエデ「昨日の決意はどうした？」

作者「ご、ごめんなさい。マジで書く時間が22時過ぎからしか無かったもので」

カエデ「三日坊主にもなってねーじゃないかよ！！ このアホ作者！！！！」

（カエデ説教中・・・）

作者「・・・という事で今回も読んで頂きありがとうございます！！
（足が正座で痺れている）」

カエデ「今回は全体がシリアルというか切ない話だったな」

作者「シリアルじゃねーよ！！ （ピクッ） シリアスだよ！！（ピクピクっ！！）」

カエデ「それに名前しか出てない親父が何時の間にかに死んでるし」

作者「コレは後々のフラグでもあるのさ」

カエデ「物語の進行の為に殺したのか、作者ー！ー！」

作者「何をいう、これはカエデが主人公の物語だ。という事はカエデ！ お前が殺したようなものだ！」（ドヤあ・・・）

カエデ「なん！？・・・って言う訳ねえだろ！ー！」（右ストレートを放つ）

作者「ぶべらっ！？」

・・・ここから質問コーナー・・・

Q・努力してる時点で、チートじゃないじゃん！ どういう事なの？

作者「書いて早々質問来るとは思わなかった」

カエデ「流石なのは梓、検索のし易さも合いまって二日で1000PV目前とは・・・」

作者「読んでくれる人がいる限り、頑張りますよ！」

カエデ「で、今回の質問だが、確かに努力とチートって正反対の言葉だよな」

作者「まあ所謂チート系主人公って奴は本編でも言うとおり、魔力

が初期から最大値とか、魔法に代わる誰にも負けない能力やレアスキルの保持とかが一般的だよね」

カエデ「確かに、でも自称神はくれなかったぞ」

作者「この物語のというか、カエデくんのチートって言うのは所謂リアルチートって存在なんだよ」

カエデ「リアルチート？　ってあれか？　イチローとか、パウプロの完成したサクセス選手みたいな奴か？」

作者「うん、まあ後者は何とも言えないが、メジャーリーガーのイチロー選手って高校時代から怪物とか天才とか言われて居たけど、実際は才能に胡座を掻いてた訳ではなく、日々の努力。食生活から練習の一つ一つまでに気に掛けることで10年以上メジャーでスタメンを維持出来るんだと思います」

カエデ「確かに、超一流を保つためには、日々の努力が必要なのかもしれないな」

作者「それにカエデには努力をしなければ一般人と同等しか出来ない」と神は言っていました、逆に言えば努力しなくても一般人レベルは確実に能力を持っている、それ以下にはならない。と考えればそれだけでも充分チートと呼べると思う」

カエデ「まあ、何をやっても人並みに出来るって言われると充分チートって言えるかもしれないな」

作者「という事で、今回の質問の解答はコチラ！」

A・
傍から見ればチート、でも陰ではしっかり努力しているんです。

・・・質問コーナーここまで・・・

作者「さて、次回はいよいよ舞台を海鳴に移します」

カエデ「かなり長かったな」

作者「確かに、今まで原作のげの字も出ていなかったしな」

カエデ「原作のキャラだつて一人も出てないし」

作者「いや、一応ほんのちよつとは原作に関わるキャラは出したよ」

カエデ「ええ！？ どどこどこ؟؟ (作品を読み直す)」

作者「まあ、描写はほぼ0だしヒントとしても時系列的に考えるしか無いけどね」

カエデ「クッソー、わかんね」

作者「番外編を出せたら、そんな時に説明出来るんじゃないかと思っているから、
気長に待っててね」

カエデ「ご意見、ご感想、ご質問をお待ちしています ノシ」

作者「次回は遂にあの白い悪魔が登場!!」 ノシ」

カエデ「それでは」

二人「また次回!!」

???「にやは、悪魔って一体全体どういう事かな?」

第4話

海鳴での出会い（前書き）

海鳴突入。

オリジナル設定？

なにそれ美味しいの？

文章上、おかしな点があったら、報告よろしく願います。

第4話 海鳴での出会い

海鳴・・・

海に面している街とそれを覆うように囲む山々が共存している場所。

原作の主要となる場所。

「んーっ！ 潮の香りが良いわね」

母さんはその場で伸びをして、そう言った。

今いるのは海鳴海浜公園、名シーンの舞台というやつだ。

此处でなのはとフェイトが友達になって、リボンを交換する・・・
・聖地巡礼というわけじゃないが、何とも言えない感動があるな。

「さて、カエちゃん。今日からこの街で住むけど気に入るかな」

何か思う所があったように僕が黙っていたからだろうか、母さんはそんな事を聞いてくる。

「うん、自然も一杯で気持ちいいよ」

前の旅行の時には主に高地を中心に回っていたため海付近は来なかったしな。

「そっか、それじゃあ家に向かうよ」

そう言って母さんは僕の手を取りゆっくりと歩き始めた。

どうしてこうなった。

「あら、お隣さんですか？ 私ルミ＝F＝川端と申します。この辺りで動物病院をやっている、榎原のはとこで此方のお家に今度越してきましたので、これからよろしくお願いします」

むしろ、どうして気付かなかった。

「あら、ご丁寧に。高町桃子です。愛ちゃんには親族は居ないと聞いてましたけど・・・」

ひいじいちゃんの苗字が槇原ってことを・・・

「祖父は単身海外に渡り、冒険をしていた人で、縁はその時に絶たれてしまったらしいんですけど、数年前に兄の息子が死んだと聞いて単身此方に戻ってきたんですよ。その時丁度私も付いてきて知り合ったって所ですね」

確かに、丘の上に立つ寮に挨拶に行った事は覚えている。

「それはまた、破天荒なお方だったんですね。 . . . 失礼ですが
その子は弟さんかしら？」

だがしかし . . .

「この子は私の息子です。 カエちゃん、挨拶してみなさい？」

どうして高町家の隣がウチなんだ!???

「僕、カエデです。5歳です」

「あら、ウチの子と同年だったのね。なのはっていう女の子だけど、これから仲良くしてくれるかしら？ カエデ君？」

三時間後……
『ピンポン』

大方、引っ越しが終わって一息ついた時、インターホンが鳴った。

「お隣さんが来たみたいね。カエちゃんも男の子なんだから、しっかりとお話しなさいね」

僕の背を押しながら、母さんと共に玄関へ向かう。

（ガチャ）「お待ちしていました、どうぞお入りください」

ドアを開いた先には・・・

桃子さんの背後に隠れようとしてつつ此方を気にする一人の少女がいた。

「・・・高町・・・なのは、なの」

後ろ髪を二つに分けて結んだ所謂ツインテール。

遺伝なのか、桃子さんと同じ色の髪が揺れ動いている。

小さすぎて聞こえないんじゃないかと思う位の声だった。

「か、・・・カエデ・・・フォーレットです。よろしくね、なのはちゃん」

そう言って、僕はなのはちゃんに握手の手を延ばした。

これが、僕となのはの出会いであつた。

第4話 海鳴での出会い（後書き）

作者「という事で、第4話でした」

カエデ「またトンデモ設定持ってきたやつて」

作者「最初、石田先生のはどこにするか迷った」

カエデ「それにしても設定としたら、とらハ2の終了後なのか」

作者「ああ本作品でわな、ついでに作者はとらハ未プレイで知識としてはwikiと他の作者さんの作品内に出てくる程度しかない」

カエデ「という事はその辺の時間軸はバラバラ？」

作者「そうだね、でも4話終了時には士郎さんは退院している事になって居るから、安心は出来るよ」

カエデ「なるほどね。にしてもちっちゃなのはカワユス（「（

「

作者「あんな天使が悪魔や魔王と呼ばれる未来なんて、この頃には想像なんてできるもんじゃないからな」

カエデ「たしかにな、しかし今回は質問は無いか」

作者「前回が特別に来たぐらいだな」

カエデ「さて、この後はどうなるんだ」

作者「3年位飛ばしてみようと思う」

カエデ「原作一步前ってことが、それではまた次回ノシ」

作者「ご意見、ご感想を楽しみにしてます。ノシ

第5話

そして3年の月日が経ち（前書き）

原作直前まで来たよ。

3000PV突破！！　ありがとうございます。

ここまで沢山の人に読まれるとは思いませんでした！！

これからも頑張りたいと思います！！

文章上、おかしな点があったら、報告よろしくお願いします。

第5話

そして3年の月日が経ち

「なのはー！！ 迎えに来たぞー」

なのはとの出会いから3年と少し、小学3年生になったカエデ「フオーレット」川端です。

え？ なんで3年も飛ばしたかって？

小学校に入るまでは、大体毎日一緒に遊んでいたし、1、2年の時は同じクラスにはなれなかった。

「待って、カエデくん！」

玄関ドアを開き、いつものツインテールを跳ねさせて急いで僕の方へ来るなのは。

出会った当初は土郎さんの怪我で一人ぼっちが多かったせいかな、声

も小さくいつもおどおどしていた。

それでも僕にとって初めての同年代の友達だった為か、なのはにばつか声を掛けて居ると、次第に本来持っていた明るさを取り戻していた。

原作のイベントだが、アリサとの喧嘩も制服をボロボロにする位のレベルまで達していて、すずかは兎も角周りの子ども達も泣いてしまう程であった事は二年近く経ったものの今でも私立聖祥学園付属小学校の伝説になっている。

「カエデ君、今日もなのはをよろしくね」

そう言つて、ニコニコ微笑む桃子さん。

確か、原作開始時の年齢が………凄く黒い殺気を感じたためこれ以上は考えるのを止そう。

どう考えても母さんと同年齢にしか見えない、これが高町家固有のレアスキルなのか!?

「お母さん、なのはしっかりしてるもん！　　　カエデ君行こうなの！！」

「ちよっ！？　　　待つてなのは！！　　　そんなに引つ張らないで！
！　あ、いつてきます、桃子さん」

少し恥ずかしかったのだろう、なのはは僕の手を強引に引つ張り学校に向かう。

流石は聖祥の白きぼ・・・・・・・・一瞬、なのはの僕を掴んでいる左手に今まで以上の力が込められた気がする。
この察知能力も高町家固有のレアスキルなのだろうか？

「あらあらなのはったら、いつてらっしやい。・・・・・・・・ふふ」

そんな状況を笑顔で見送る桃子さんであった。

s i d e なのは

私、高町なのは。私立聖祥学園付属小学校に通う小学3年生です。

隣にいるのは私の一番の友達のカエデ「フォーレット」川端、カエデくんなの。

髪はよく見ないと判らない程度に青み掛かった黒、少し伸ばしたくせ毛の無いストレートヘア、身長は130cm位となのはと同じか少し小さい位。お母さんのルミさんに似ているのか小顔でパーツが整っていて美形、夕陽の様な瞳は垂れ目も相まって穏やかな印象を受け取れるの。

「今日から3年生だけど、なのはは勉強大丈夫か？」

「う、うん。多分大丈夫なの。」

勉強もアリサちゃんと同じ位出来るし、運動もなのはよりも全然出来る。

「そつえば、今年は一緒のクラスになれると良いね」

「そうだな、でもアリサとかが五月蠅そうだな。アレ勝負、コレ勝負って」

「にははは、確かにそうかもしれないの」

小学校に入る前から仲良しさんだったけど、1、2年は一緒のクラスになれなくて、家で落ち込んだりしちゃった。

アリサちゃんとすずかちゃんを紹介してからはよく4人で遊ぶようになったけど、バスまでの道のりのこの時間は私とカエデくんの二人だけの空間なの。

ブロロロロロ……

時間通りに登校バスがやってくる。

私とカエデ君がバスに乗り込むと・・・

「なのは！ カエデ！ おはよう！-！」

元気な声で挨拶をしてくるアリサ「バニングス、アリサちゃんと。

「なのはちゃん、カエデ君、おはよう！」

清涼感のある声で挨拶をしてくる月村すずか、すずかちゃんが手を振って待っていた。

「おはよう！ アリサちゃん！ すずかちゃん！」

「おはよう、アリサ、すずか」

私とカエデ君は一緒に返事をした。

「さてと、なのは準備は良いわね？ 新学期一発目、絶対勝つわよ！」

「私も負けないからね」

「絶対に負けないの！」

side

カエデ

「ふふ、あそこでパーを出したのは五手後のグーのフラグだったのよ」

「ごめんね、なのはちゃん」

「うー、どうしてあそこでチョキ出しちゃったんだろう・・・」

現状を説明するとだな。

席順を決める為にじゃんけん↓俺は参加不可↓アリサとすずかの作戦勝ち↓なのはがいじける。

といった所だ。因みに席順はアリサ―僕―すずか―なのはの順になった。

「そつえば、クラス替えどうなるかな？」

落ち込んでるなのは少し見るに耐えなくなったため、話を変えようとした。

「今年も僕だけ一人クラスが違ったりな」

「それは、絶対阻止するわ！（よ！）（なの！）」

と息のあった答えが帰ってきた。

ついでに両側の二人が寄って来た。

同時にバスの前方から男共の殺気も感じてきた。

僕にどうしろっていうんだ。

第5話

そして3年の月日が経ち（後書き）

作者「もげる」

カエデ「オイマテ作者」

作者「何だ主人公、今小坊の癖にリア充滿喫しているどっかの奴に鉄槌を下そうと思っっているんだから、後にしてくれ」

カエデ「それは俺のせいじゃない！！ それに明らかにアリサとすずかに好かれてるけど、いつの間に建設したんだ！？」

作者「それはきつとガールズトーク回に話されるとわれ」

カエデ「ガールズトークとかwww、この作者に出来るとは思えない」

作者「妄想は経験を凌駕する！！ っていうか、今回初めてカエデの容姿に関する描写が出てきたね」

カエデ「むしろ今まで一言も出てなかった事に驚きだ。作者が普通に忘れていたんだと思っていた」

作者「むしろ、逆だな。今までイメージをつけない事で、読者に想像してもらっていたけど、俺も想像じゃ最後まで書き切る自信が無かった事と、今回もう一つ新しい試みで主人公以外の視点からの描

写を入れる事で、カエデの外見を大雑把に固定して、想像しやすくしたつてのが主な理由かな」

カエデ「作者から長い且つそれなりに説得力の有る発言が飛び出るとは思わなかった」

作者「うっさい、・・・それにしても意見や感想来ないな」

カエデ「脱字の報告が無いと考えれば、正確な文章を書けていると評価されるのだと思うがな」

作者「コメント欲しいけど、アンケートとかする程話数も経ってないしな」

カエデ「まあ、それは弛まぬ努力が必要だな。書いて書いて書きまくれや」

作者「それがやっぱり確かか。て事で、次回予告、カエデこれ読んで（カンペを渡す）」

カエデ「ちょ、おい！　　たく。『無事小学3年になったカエデ。しかし、それは大いなる意思が働く序章に過ぎなかったのだ！　次回、魔法少女リリカルなのは　次元を超えし転生者　第6話　はじまりの始まり　次回も、リリカルマジ狩る頑張ります　！！　　てへっ』　　.....」

作者「おお、そこまで読んでくれるとは流石主人公！！　　例え少年でも、てへっ♪　　はキモイなwww」

カエデ「・・・Am　I　kill　you？」

作者「は？」

カエデ「199!!」

作者「ぐへっ!!」

そして作者の倒れた近くに血文字が発見された。

『また、次回。ノシ』

第6話

はじまりの始まり（前書き）

スマホで書いてたら、途中で誤って戻るボタンを押して書き直し。
テンション下がるわ。

PV・・・昨日は3000突破とか言っていました、
今現在（8日0時現在）、PV5932・・・
週末の魔力半端無いな。

文章上、おかしな点があったら、報告よろしくお願いします。

第6話

はじまりの始まり

バスが小学校へ着き、僕たちはクラス替えの掲示を見た。

「やった〜！

カエデ君と一緒にクラスになれたよ!!」

まるで大学受験に合格したかの様に喜ぶのは。

「一緒にクラスになったからには、中間、期末以外も色々な勝負をするから覚悟しなさいよ! カエデ!!」

正に『ビシッ!!』というSEが聞こえそうな位に此方に指をさしてくるアリサ。

「良かった、今年はみんなと一緒にクラスになれたね」

僕とというか、皆と一緒にのクラスになれたことを喜ぶすずか。

そんな喜ぶ三人娘を横に僕は掲示のある一点を見つめていた。

「別々のクラスになっちまったか・・・」

三人に聞こえない様に呟いた声、その声が届いたのは恐らく僕だけだろう。

僕の視線の先、掲示に記される一人の名前。

それはなのは、アリサ、すずか、そしてここには居ないもう一人の少女と最大の友となる者の名。

『八神 はやて』

そう記されていた。

始業式も滞りなく終わり、今はなのはの実家の喫茶店である『翠屋』に来ていた。

翠屋は店主の土郎さんの淹れるコーヒーと、パティシエである桃子さんが作る洋菓子が人気の喫茶店で、お昼時にサンドイッチなどの軽食も置いてある海鳴の人気店の一つである。

僕たちはケーキにジュース、そして小学生らしい会話が……

「全く、最近の授業指導要領は意味が判らないわよ!!」

「そうだね、毎年改訂改訂って言われても何処を変えたのか明確じゃない部分もあるし」

「以前、円周率が3になった時だって、結局1年で戻したりしていたし、何がしたいんだって言われても仕方ないと思うよ」

「とにかく！ 現状を知っているのは、私たち子どもたちだし、ゆとり世代って言われてもそのゆとりを作ったのは、大人なのよ！

結局、私たち子どもは世の中の被害者でしか無いのよ！」

「……訂正。大人より大人の会話してるわ。」

まあそんな会話についていつてる俺は前世の知識があるからだけど、大学でもこんな会話したことないぞ。

「じゃ・・・じゃは・・・」

あ、なのはがショートしてる。

「あはは、なんか小学生らしくない会話が聞こえたけど・・・なのはは止まってるし」

そんな会話をしていると薄暗い茶色の長い髪を三つ編みに纏めた眼鏡のウェイトレスさんがやってきた。

「あ、お姉ちゃん、おかえりなさいなの」

「美由希さん、おじゃまします」

「お邪魔してます」

「邪魔はしてないよ、美由希さん」

なのは意識を取り戻し、それぞれ挨拶した。誰がどれかって言わずとも分かるだろう。

彼女は高町 美由希。なのはの姉であり、ここ翠屋でウェイトレスとしてアルバイトしている。

「いらつしゃい、アリサちゃん、すずかちゃん。カエデ君、恭ちゃんが後で道場に来て言ってたよ」

「なん・・・だと!？」

美由希さんの連絡に驚愕し、お決まりの言葉しか出なかった。

「練習試合か・・・それとも乱打ちか・・・むしろ帰国したからって色んな意味でのストレス発散か？ どれにしても、碌な事にならなそうだ」

「お姉ちゃんと恭也さん、もう家まで着いたんだ。ノエルさんもフアリンも今頃夕食の準備かな」

僕がブツブツ言ってる横ですずかが呟いてた。

「あのさ、カエデ・・・・・・・・・・」

「（ブツブツ）・・・・・・・・ん？　　ああ、どうしたアリサ？」

僕がこの後の死合（誤字にあらず）の戦略を考えているとアリサがこっちを見てきた。

「この後、道場での練習見に行ってもいいかしら？　　カエデの練習姿ってあんまり見たことないし」

僕の練習姿か、確かに学校じゃ剣道なんかやらないし、本気とか出したら色々騒がれるしな。

「別にいいよ、なのはとすずかも来るか？」

「うん、行くよ！　　カエデ君の剣道着姿、カッコいいしね！」

「じゃあ、お言葉に甘えて・・・」

二人は即答した。

あ、遅くなるかもしれないから母さんに夕食作って貰わなきゃ。

「あ、母さん。今日ちょっと遅くなるかもしれないから夕食作っておいてくれない？」

そう言っつて別のテーブルの後片付けをしている、母さんに声を掛けた。

「じゃあ、今日は進級記念って事でカエちゃんの好きな物を一品、多めに作っちゃうからね」

そう、母さんはこっちに来てからお隣さんってことで、翠屋で働くことになっていた。今じゃサブチーフマネージャーまでになっている。

チーフマネージャーの人は、今海外に留学に行っているらしい、名前は聞き忘れたけど明るい茶髪の似合う歌の上手いお姉さんだったな。

「ありがとう、母さん。それじゃあみんなそろそろ行くよ」

そう言っ僕となのは達は、翠屋を出てなのは家の隣にある道場
に向かうことになった。

第6話

はじまりの始まり（後書き）

作者「今回は長かった気がする」

カエデ「それは書き直したからじゃないか？」

作者「……………かもしれない」

カエデ「それにしても今回新キャラ多かった気がするな」

作者「名前だけの人から、風貌だけの人もいたな。全員知っている人は、かなりのなのは通だな」

カエデ「最後の人なんて、なのは関係無いじゃないか」

作者「いやまあ、翠屋を舞台で考えると作中に出ないとしても、こういう表現でも出た方がとら八からこのシリーズのファンの人にも読んでもらいたいと思ってね」

カエデ「でも、知ってるのはwiki情報だけなんだろう？」

作者「だが、作品に深みが出るじゃないか」

カエデ「お前がそう思うなら、まあ良いけどな。適当に出してファンに反感買わない様に頑張れ」

作者「ぐぬぬ。善処するぜ」

カエデ「にしても、次回は戦闘か」

作者「ああ、この作品初の戦闘シーンになるな」

カエデ「……………書けるの？」

作者「……自信は無いが、頑張る」

カエデ「それでは！」

作者「また次回！」

二人「じゃあねー ノシ」

第7話

剣士時々シスコン

前編（前書き）

戦闘回です。

長めになったので、二分割。

の割には戦闘描写少ない。

つか、文章が少ない。

文章上、おかしな点があったら、報告よろしくお願いします。

第7話

剣士時々スコン

前編

ガラガラガラ！！

僕が道場の引き戸を開けると、そこには一人の黒髪の青年、なのはの兄である高町恭也、恭也さんの姿があった。

「お久しぶりです、恭也さん」

「久しぶりだな、カエデ。訓練は続けていただろうな？」

恭也さんは藍色の道着を着て最奥に座っており、挨拶をすると立ち上がり、此方に向かってきた。

「勿論ですよ、自主練も欠かしてませんし、御神流の技の練習だつて、土郎さんや美由希さんに教えてもらってますし、簡単にはやられませんよ」

既に僕も道着を着て、木刀の準備をしながら恭也さんに言い返した。

御神流・・・正式名称は教えてくれなかったが、御神真刀流・小太刀二刀術とか言うらしい。

剣術と言う事で、剣道とは異なり人を殺める為の術である。

元々、士郎さんは御神流を使って要人警護・・・ボディーガードの仕事をしていたらしい。

しかしテロに遭って大怪我をして引退し今は翠屋のオーナーと継承者作りに勤しんでいる。

僕が御神流を学んでいる理由は二つ。

一つは表向きで、昔僕もテロに遭い父さんを亡くした事から、周りの友や身近な家族を守りたいという点で強くなりたいと思ったため。

士郎さんには、こう言って門下生として受け入れさせてもらった。

もう一つの裏の理由。それはこれからの原作の進行に向けて全体の底上げがしなかったからだ。

勿論魔法の訓練も母さんに頼んで行っている。流石元戦技教導官、魔力運用法や僕の素質に合った魔力増幅練習、魔力弾の制御などを教わっている。

まあ魔法関連はこの場では置いておこう。

「で、今日の鍛錬内容はどうするんですか？」

「乱打ち5分の10セット。その後は練習試合を3本。と言ったところかな」

「分かりました。・・・さてと、なのは達は脇で見ていてくれ」

予想通りしんどい鍛錬内容だ。後ろに続いて入ってくるなのは達を道場の隅に誘導していった。

「お兄ちゃん、おかえりなの」

「ただいま、なのは。なのはが道場に来るなんて珍しいじゃないか」

「うん、カエデ君の練習を見てみたいなって思ってた来ちゃったの。駄目だった？お兄ちゃん？」

「うっ、いやダメじゃないぞ。すずかちゃんやアリサちゃんもそっちで見てください」

今のやり取りで感づく人は居るだろうが、恭也さんは重度のシスコんだ。しかもなのは限定のである。

同じ妹の美由希さんには厳しく、兄弟子といった感じだからなのだろうか。

「さて、カエデ。そろそろ始めるぞ」

なのはとの会話を終え、再び此方を向く恭也さん。何処となくさつきとは違う覇気が感じられるのは、妹の目の前で良い所を見せたいからだろうか。

「よろしくお願いします」

呼吸を整えて僕は恭也さんから間合いを取った。
小太刀を模した2本の木刀を逆手に持ち集中力を高める。

僕と恭也さんの間になんとも言えない間が広がる。

「先手はカエデからだ、一発叩き込んでみる」

恭也さんは先手を譲ってくれるようだ。お言葉に甘えてと行きたいが、半端な攻撃だと返されて一発で終わってしまう。

「ハッ！！」

息を吐いて低く恭也さんに突っ込む、そして顎を狙って左手を切り上げる。

「くっ、少しは速くなったか、息を吐くタイミングと身体の力の入れ方はまだまだだが、ハッ！！」

恭也さんは難なく右の小太刀で止めて、左の小太刀で脇腹を狙ってくる。

カッ！！ シャーッ！！

狙ってきた小太刀を鈍角から受け流すように合わせて滑らせる。力じゃ勝てない現状では危険性の低い鍔迫り合いよりも、危険性が高いが相手の力を利用する合気のような戦い方が合っているという事だ。

日々是戦場、将来を見据えた練習も必要だが限られた状況下で機転を効かさなければ対象を守る事も、倒す事も出来ないのである。

右から左、左から右と受け流し、恭也さんが空けている場所に打ち込む、と言ってもワザと空けているので狙った所は防がれてしまった。

狙いの基本は急所と呼ばれる場所だが、それは相手も理解しているので避けられるか防がれる。

防がれる前に打つ。これを繰り返すのが乱打ちの練習になる。

「・・・・・・・・よし、10本終了。10分の休憩後、練習試合をするぞ!」

「・・・・・・・・分かりました。ありがとうございます」

つつ・・・かれたー！。恭也さん、少しでも隙を見つけたら強打してくるんだからな！。

「お疲れ様！ カエデくん！」

一息着こうと思ったら、なのはがタオルを持ってきてくれた。

「カエデ、なんであんたそんなに動けるのよ？」

アリサは不服そうに言いながら、近づいてくる。

「恭也さんって凄い剣士だってお姉ちゃんが言ってたけど、こんなにぶつかり合いしてるんだ・・・」

すずかはスポーツドリンクを持ってきてくれた。

そうだな、アリサの疑問は勿論だろうから喋れる範囲で話そうか。

僕はすずかから貰ったスポーツドリンクを一口飲むと、口を開いた。

第7話

剣士時々スコン

前編（後書き）

作者「次回！ 遂にカエデの秘密が明らかに！？」

カエデ「と言っても、本編で語られている事が殆どだけだな」

作者「それにしても・・・」

カエデ「どうした？」

作者「明日から大学が始まる」

カエデ「明日って・・・祝日だろ？」

作者「ゼミは有るんだよ・・・成人の日関係無いから」

カエデ「・・・・・・・・マジか」

作者「ほっといっていた卒論書なくてわ」

カエデ「おい、何をほっといてんだよ」

作者「発表の準備もしなきゃ・・・」

カエデ「やる事一杯だな」

作者「そうだよ、だから明日は更新がさらに遅くなるかも・・・」

カエデ「遅くなるのは仕方ないが更新はしろよ？」

作者「……………うん」

カエデ「その物凄く長い間は何とも言えないが、頑張れよ」

作者「さて、今回はシスコン兄ちゃんとの対決だな」

カエデ「グッ……あれマジきついから。一度やってみ？
生に容赦無さすぎたって……」
小学

作者「さて、俺が明日書ける事を祈って、今日はここまで！
では
また次回まで！」

二人「ノシ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1274ba/>

魔法少女リリカルなのは 次元を超えし転生者

2012年1月9日02時50分発行